

漢法苞徳塾資料	No. 032
区分	治療・治則
タイトル	簡易経絡的治療チェック表
著者	八木素萌
作成日	

◎簡易システムで行なう診察項目と手順

◇基本的な診察項目とその手順

- 【a】主訴を聴取し、八虚診と蒙色と背候診で、五行的な見当をつける。
 - 【b】腹診（難経的・腹部の蒙色・腹部の景色）と脛・募穴診で、上の【a】でつけた見当をさらに深める。
 - 【c】舌診で「気」「津液」「血」などと五臓の見当に進める。
 - 【d】聞診して、呼吸の状態（痰と嗽と喘その他）と、体臭と、クリック音やグル音などの、音と臭いをチェックする。
 - 【e】腹診（夢分流）と側腹部診と胸部触診で、変動している臓腑と、「痰」「食」「瘀」「飲」や「積聚」などの見当をつける。
 - 【f】腹診（入江・小田法、丸山法、間中法）で臓腑経絡的な変動を把握する。
 - 【g】問診によって、
 - 〔1〕嗜好、職業や年齢やライフスタイルや家族などの人間関係、心理的傾向、疾病歴、遺伝的問題、などの基礎的事項を把握する。
 - 〔2〕主訴に関連して確認して置かなければならない事項を問診する。
 - 〔3〕嗜好の変化、精神的情緒的に屈託させているもの、愁訴と診察によって得られた圧痛その他の症候情報が意味している病態との関連性の把握に務める。
 - 〔4〕発症時の状況と経過について患者の自覚している処を把握する。
 - 〔5〕以上の結果をカルテに記入する
 - 【h】脈診（脈状診）と六部脈診を行なって、脈診表に記入する。
 - 【i】切経診（撮診・撫擦診・圧擦診・運動診）を行なう。
 - 【j】以上を勘案し、総合・帰納・類推・推測・対比・分析などの論理的操作を加えて辨證を行なう。
- ※辨證に際して留意しなければならない事
- 〔1〕陰陽的には矛盾がないか。
 - 〔2〕五行的には矛盾が有るか無いか。

- [3] 五行的に矛盾が有る場合には、その矛盾が相生的（母子関係か子母関係か）であるか、或いは相剋的（賊邪か微邪か）であるか、これらをチェックする。
（病は複数の要素が反応している場合が多いから）
- [4] 単純な運動器疾患（整形外科的疾患）か否か、内科的疾患か否か、精神神経科的疾患か否か、その他（心療内科的なもの等）についてチェックする。
- [5] 傷痕の類の影響に拠る違和であるかどうかのチェックを行なう（不内外因）。

※辨證の項目

- [1] 内外辨別。（不内外因も診る）
- [2] 病因辨別（外因の場合は邪の五行の把握〈重複的である事が少なくないので主と副の見当が必要〉、内因傷の場合は病理的産生物〈痰・飲・瘀・火など〉の把握と病臓の五行的把握が必要）。
- [3] 五臓・六腑の辨別。
- [4] 六経の辨別（主と副や併や合やがある場合もある）。
- [5] 衛・気・榮・血と三焦（上・中・下）の辨別。
- [6] 真と仮の辨別。
- [7] 八綱辨証（陰・陽・虚・実・表・裏・寒・熱）と「燥・湿」辨別。

◇診察は「簡」（概略・大凡）から入って次第に「繁」（詳細・精密）に至るものである。診断と施治もまた「概略的」水準から「精緻で高度」な水準まで、種々の段階がある。この水準は治療家の学術とキャリアの水準に依存しない訳には行かぬものである。したがって、最低限これだけは確保しよう！！では無いか、という提案が我々の方式である。

◇陰と陽、急症か緩症か、五行的に掴まえれば何が問題か、外感病と内傷病と不内外因の区分はどうか、変動している臓腑経絡は何かが判定出来れば、治療方針は樹てられる。あとは基本的な手技手法の運用が出来て、効果の程度が判定できれば、相当な水準であると言える。

◎◎◎ 陰陽の診別 ◎◎◎

陽	陰
動	静
赤黄	垢黒 垢青 垢黄 垢白
鮮色	晦天色
上	下
急	緩
背	腹
四肢	軀幹
右病	左病
表症	裏症
発熱口渴	怕冷口和
粗呼吸（喘満）	少気
煩悶煩躁	倦墮易疲労
熱	寒
冷飲	温飲
脈……浮数滑	遅沈

◎◎◎ 内傷と外感の診別 ◎◎◎

内傷	外感
手掌温度＞手背温度	手掌温度＜手背温度
左関＜右関	左関＞右関
但し、 温病とくに伏暑感冒の場合には、「左関＜右関」となる場合が多いので、他の要素も充分に注意することが必要	
陰経変動が主となる	陽経変動が主となる
背部腧穴反応が著名（主）	腹部募穴反応が著名（主）
舌質の変化 （形態・色・動き）	舌苔の変化 （厚くなり色濃くなる）

◇脈診はできなくとも、臓腑経絡の変動と病因と補瀉決定の根拠とは診断できるものである。

従って、経絡的な治療は、充分に、かつ、かなり高度なものが施行できるものである。

脈診が出来るならばそれに越したことは無い。

これらの診察結果は、カルテに記録して、専門家であれば誰でも判定可能にしておくべきである。

脈診も脈図に表現するべきもので、図示は可能である。これが当塾の基本的な主張である。

◎・病の内外・病の大過と不及・病因の五行・病臓の五行・病位（経脈か三陰三陽か経別か奇経か大絡か絡か経筋か）・反応の病症及び経絡的体制と病因の五行と病臓の五行などの相関を論理的に首尾一貫した形で描出しているか？

- ・如何なる治療規則を採用するか？
- ・施術する方針は？
- ・予後判断は？
- ・養生および節制上の注意指示？

等を極力明らかにしようとするべきである。